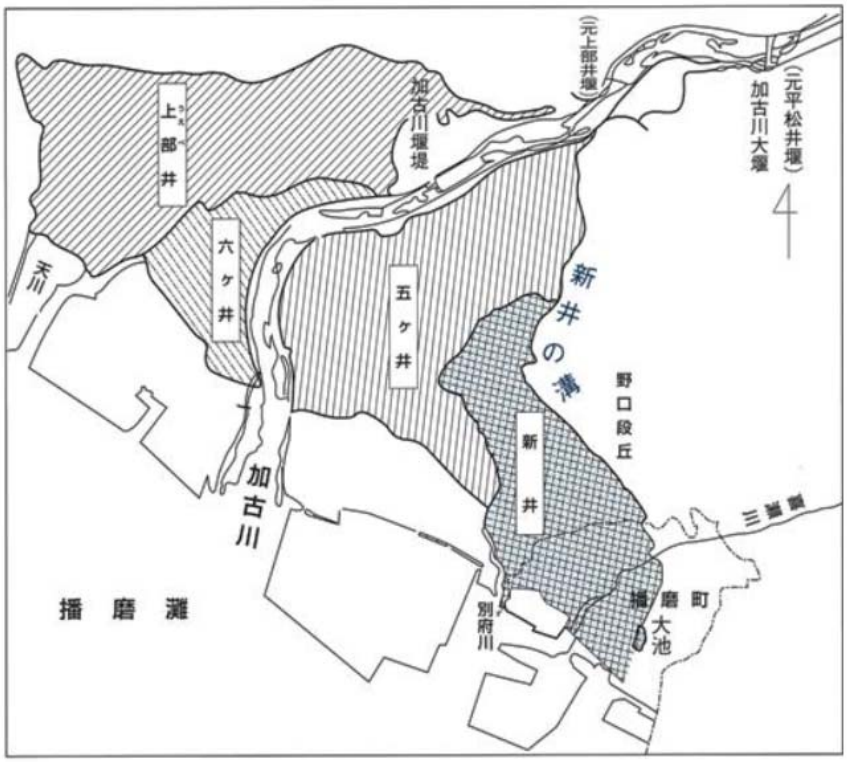
２０１９．９．２２
畑　啓之

新井開削の父 今里傳兵衛　取水口からの傾斜のない地に水を導いた功績は大きい

新井開削の父 今里傳兵衛　　五ヶ井から分水した新井（しんゆ）　よりの引用
https://www.town.harima.lg.jp/kyodoshiryokan/kanko/rekishi/imasato.html

新井は、加古川大堰(八幡町中西条)から取水した五ヶ井の水を分けてもらい、池や田に供給しながら播磨町古宮大池までの 14km 弱を流れる用水路です。明暦 2(1656)年 3 月に開通しました。

身命をかけた新井開削難工事は、西ノ山や日岡山山麓の固い岩盤削り、喜瀬川の底に水を通す埋樋(うずみび)などで、その上、加古川の台地約 10km に傾斜がほとんどなく逆勾配もあったので、満水にしなければ水が流れないことでした。傳兵衛は、この計画を藩主忠次に願い出たとき、「新溝でもし水が流れないときは、家族もろとも極刑にされても構いません」と断言し、早期の工事着工を強く要望しました。傳兵衛の身命をかけた計画に感銘した忠次は、直ちに測量を命じ、藩の事業として着工させました。秋も深まっての陳情にもかかわらず、年内に設計を終え、新年早々着工できたのは、傳兵衛の綿密な計画があったからだといわれています。



加古川下流農業用水給水区域図

傳兵衛は、連日桧笠をかぶって水路を見てまわり、夜も提灯を持って検分したと伝えられています。工事には、藩内全域から延べ 16 万 4 千人もの人足が集められ、わずか 1 年余りで通水を成しとげました。一日平均 400～500 人の人足には、藩から米が支給されました。

書籍「今里伝兵衛と新井水路（新井土地改良区、1980 年)」によると、水路の全長は 13km あまり、水路の勾配は 4 千分の 1 、灌漑面積 600 ヘクタール（約 600 町)、石高 1 万石とある。これは、1 反（たん）あたり約 1.7 石となる。新井用水の完成前には、新井の村々は頻繁に干ばつに襲われ、食べるものがなくなる年もあったそうであるが、水路完成後にはそのようなことはなくなり、しかも毎年安定して豊かな実りが得られるようになった。稲美町史に示された江戸時代の石高と比較すると、灌漑の効果がいかに大きかったかがわかる。江戸時代にはいなみ野台地はまだ豊かな水は得られていない。

稲美町史（1982年）　p215より

表12　　石　盛　一　覧　表

土地 / 村名	上田	中田	下田	下々田	上畑	中畑	下畑	下々畑	屋敷
国　安（寛延３）	1.9	1.7	1.5		1.3	1.1	0.9		
六分一（明和１）	1.9	1.7	1.5		1.5	0.9	0.7	0.5	
野際新（　〃　）			0.7	0.5			0.4	0.3	0.5
中一色（　〃　）	1.7	1.5	1.3	1.2	1.0	0.8	0.6	0.5	1.0
〃（寛文元禄）		1.1	1.0				0.4		0.8
岡　（宝暦14）	1.8	1.6	1.5		1.1	0.9			1.1
〃　新田分			0.8	0.7			0.6	0.5	0.6
加古新	1.2	1.2	1.2	1.2	0.5	0.5	0.5	0.5	(0.8)
下草谷	1.9	1.7	1.5		1.3	1.1	0.9		
北　山	1.86	1.7	1.45	1.2	1.0	0.9	0.7		
〃　新			0.9		1.0		0.5	0.4	0.7

国土地理院の電子地図で新井用水の勾配を見たのが次の図である。取水口の加古川大堰（水面の標高 13m）から最終池である古宮大池（同 5 m）までを直線で結びその断面高さを見たものであるが、この図を見ても今里伝兵衛の才気と苦労が伝わってくる。